

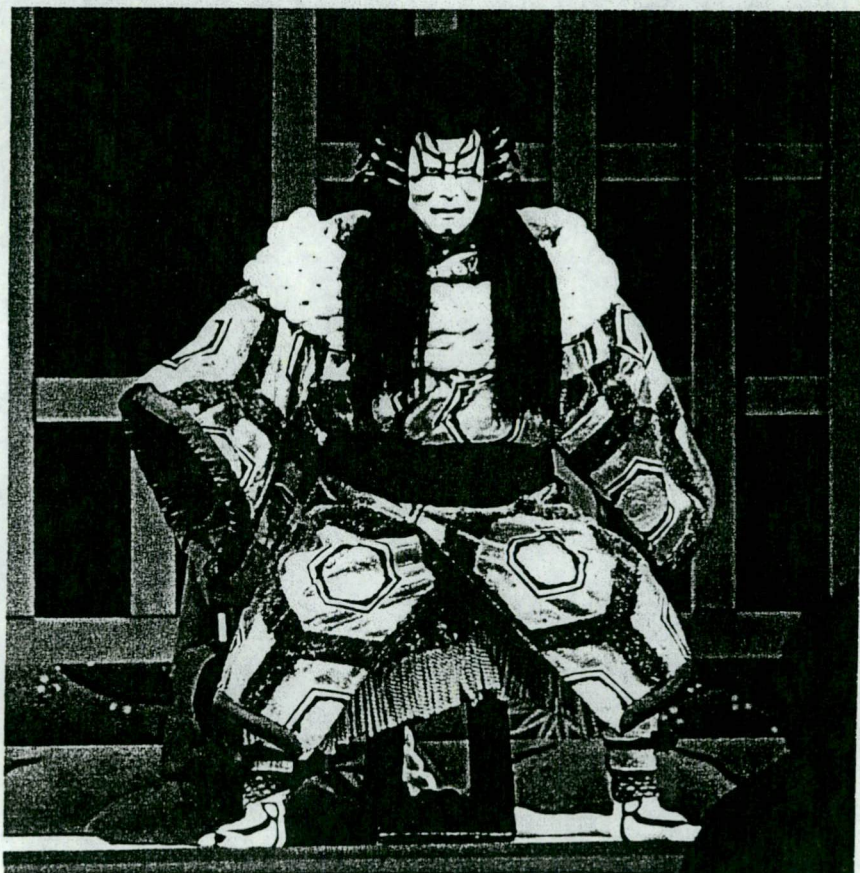
文化庁・優秀映画作品賞
歌舞伎の魅力

景清の衣裳

16mmカラー33分

企画 日本芸術文化振興会・国立劇場・製作 株式会社 英 映 画 社

「哀れに物凄く、古今の大評判」と言われた歌舞伎十八番『景清』。暗く陰惨な土牢の前の景清親子の対面と、景清の牢破り。その超人的な力に江戸っ子はただただ溜飲を下げたという単純な狂言です。舞台が絢爛たる絵画の世界であるならば、稽古着と扇子だけの稽古は無彩色のデッサンのようなもの。衣裳の重要な役目が鮮明になってきます。



株式会社 ^{はなぶさ} 英 映画社

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-6-13幸田ビル TEL03(3281)3414 FAX(3281)4680

歌舞伎の魅力 『景清の衣裳』

16mmカラー33分

企画 日本芸術文化振興会
国立劇場
製作 株式会社**英映画社**

[企画意図]

この映画は、国立劇場で上演された歌舞伎十八番『景清』に登場する役者の衣裳を主な素材として、歌舞伎の衣裳がなによりも舞台効果を第一義とするものであり、衣裳が歌舞伎独自の様式を鮮やかに表現するために洗練されたものであることを描き、衣裳の美的要素が歌舞伎の大きな魅力の一つとなっているとともに、歌舞伎の芸術的表現にとって切り離せない存在になっていることをわかりやすく解説するものです。

[あらすじ]

絢爛たる衣裳を身にまとい長々と口上を述べる『景清』。
この芝居は、源氏に捕らえられた平家の武将平景清が超人的な力を発揮して、アメとムチとで口を割らせようとする源氏方の役人どもを蹴散らして牢破りをするという、ただそれだけの話です。

舞台に登場するのは、亀甲に牡丹の花を金糸で刺繍した豪華な綿入れの景清。源氏方の役人で赤っ面の敵役は、赤に金糸で模様を下り出した袴と袴に、黒のビロードの着付け。善玉で白塗りの役人は、白を強調する黒緋子に金銀の縫い取り模様。落ちぶれやつれた継ぎ接ぎの着物、田舎娘を表す鮮やかな緑色の着物は、景清の女房・娘です。ファッションショーのように様々に舞台で紹介される登場人物は役柄の性格によって工夫され、洗練されて美しく舞台を飾ります。

普段の稽古着と扇子だけで行われる付け立ち稽古。舞台が絵画ならば、稽古はいわば無彩色のデッサンのようなもの。衣裳の重要な役目が鮮明になってきます。

舞台が作られ、楽屋では役者たちが衣裳を身につけ、祭りの興奮が高まります。衣裳を身につける事で別の人格に変身する。荒事の衣裳をつけることは、すなわち荒ぶる神になる事に他なりません。

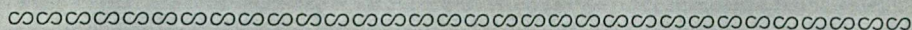
暗く陰惨な土牢の前。いよいよ舞台が始まります。「哀れに物凄く、古今の大評判」といわれた景清親子の対面の場面。舞台では、景清に平家の宝のありかを白状させようと手を変え品を変え様々な責めが行われます。刃に変わって女房・娘に琴と胡弓を弾かせて景清の心を動かそうという有名な「琴責め」。

堪えに堪えていた景清の反乱がいよいよ始まります。縦横に暴れ回る景清と唐草模様の軍兵たちの衣裳が、景清の超人的な力を効果的に見せ、絢爛たる歌舞伎の絵画的な世界を見せてくれます。

歌舞伎はマツリ。衣裳はマツリの装い。

牢を破り、軍兵たちを蹴散らして景清は花道から飛び去っていきます。

後には、衣裳が残る。そしてこの衣裳は「衣裳附帳」に書き記され記憶されていきます。



《協力》

松竹衣裳株式会社

早稲田大学演劇博物館

鳥居清光

《スタッフ》

製作	宮下英一・内海穂高	演出助手	日向寺太郎
脚本演出	松川八洲雄	撮影助手	小山 勇・嘉本哲也
撮影	八幡洋一・小林 治	録音	東京テレビセンター
照明	藤来義門・江森清八	現像	IMAGICA
解説	加藤 武	ネガ整理	川岸喜美枝